

戦時抵抗と政治犯の釈放

——岩田英一※氏に聞く（1）



吉田 健二

はじめに

- 1 生い立ちと経歴
- 2 私の戦争期——入党と全協のオルグ（以上、本号）
- 3 私の戦時抵抗——電気溶接学校の経営
- 4 政治犯の釈放

はじめに

岩田英一氏からのヒアリングは、1991年6月29日、同10月30日、1992年3月23日の3回にわたり、東京都世田谷区代田2丁目9番地13号の氏の自宅において実施した。なお第2回目のみ原正敏東京大学名誉教授（機械設計・技術教育）が同席して質疑に加わった。ほかに岩田氏からは電話、手紙、ハガキにて補充の調査を重ね、50枚余のカードを作成した。

※岩田英一（いわた・えいいち）略歴

1906（明治39）年2月9日、父要次郎・母シマの長男として、東京市牛込区矢来町（現在は東京都新宿区神楽坂）に生まれた。1917（大正6）年4月、早稲田実業学校（早実）に入学し、おもに理工系の科目を履修した。在学中、ロシア革命や米騒動の広がりのなか、天野為之校長の「経済」の授業に刺激を受けて河上肇著『貧乏物語』（弘文堂書房、1917年）などを読みあさった。

早実を卒業後、1924年7月に牛込区でラジオ商を開業し、のち京城ラジオ商会（大韓民国ソウル市）、日本真空管製作所（東京・大森）に勤めた。1929（昭和4）年、日本共産青年同盟（共青）に加入し、同5月京浜合同労組を中心となって結成し、前後して日本労働組合全国協議会（全協）のオルグとなった。

1929年11月、大山郁夫、細迫兼光らの新労農党の結成に参加し、世田谷支部の実質的な責任者となった。1930年以降、京浜合同労組の書記長として、東京・南部における組織拡大に努め、東京市電、新潟鉄工所、星製菓などの争議や、1931年9月には日本で最初の東京・浅草六区における映画館争議を指導した。

これより先、1924年6月に政治研究会、26年12月に労働農民党、1931年4月に日本共産党に入党した。

1933（昭和8）年2月、活動の拠点を名古屋市に移した。経歴を隠して高木鉄工所に溶接工として働きながら愛知時計、三菱航空機、日本車輛などの労働争議を指導した。この間、名古屋工專の小寺信次教授の研究室に研究生として通い、電気溶接の理論と技術を学んだ。

1934年春、自らの非合法活動に限界を感じて活動の第一線を退いた。同年6月に戦時抵抗の一形態として、戦争終結後を展望しつつ大工業における階級的・先進的技術者の養成をめざし、東京・杉並区馬橋に日本で最初の電気溶接学校を設立した。のち1936年4月に東京・代々木に移転した。

本稿は計3回10時間余に及ぶ証言をベースに、補充の調査を合わせてまとめたものである。また編集に際しては、原正敏氏、ご子息で千葉大学名誉教授の岩田昌征氏、世田谷区役所住居表示係、名古屋工業大学図書館レファレンス係の協力を得た。なお本稿の連載（2）中、質問者について「——（原）」とあるのは原正敏氏をさす。

ところで岩田氏に対する編者の関心は、1946（昭和21）年1月、自らが検挙された板橋事件——正式には旧陸軍板橋造兵廠隠匿物資摘発事件や、同年5月12日東京・世田谷区における米寄せ区民大会、また同日、食糧危機打開へ向けて昭和天皇に直訴すべく皇居にデモをかけて入城した事件にあった。

岩田氏が、合法再建をとげた日本共産党の中央委員候補として、また東京地方委員会の委員や、組織活動指導部のメンバーとして取り組んだこれらの活動は、1946年5月1日の復活メーデーや同5月19日における飯米獲得人民大会＝食糧メーデーの前哨をなすものであるが、まだ史実として明らかにされていない。

岩田氏の証言は、ご自身が、事実経過や事実関係を確認するため1年余の準備をへてなされたものであった。この間、編者は、板橋事件の裁判資料をはじめ、関連する文献や原資料の提供をなしたが、ご本人の関心は、むしろ占領期における板橋事件や食糧闘争というよりも戦前における非法法期の活動にあった。

そこで本稿においては、岩田氏における戦前・戦争期の活動——戦時抵抗の一形態として試みられた東京高等電気溶接学校の経営や、1945年10月徳田球一、志賀義雄らいわゆる「府中組」の政治犯出獄について、自らが取り組んだその経緯・経過について紹介することにする。なお板橋事件や食糧闘争、また皇居へのデモ・入城事件など、GHQ占領期における活動については稿を改めて紹介することにしたい。

（吉田健二）

1945（昭和20）年10月3日、「読売」紙の報道を読んで府中刑務所を訪ね、東京予防拘禁所棟に収獄中の徳田球一、志賀義雄らと面会して活動の指示をあおいた。同6日、自らが経営していた東京高等電気溶接学校の敷地500坪超と建物を日本共産党に無償で寄付した。

1945年11月、日本共産党の東京地方委員会の委員、翌46年2月の第5回大会で同党の中央委員候補となった。1947年5月、新自治法にもとづく東京都議会の選挙に世田谷区から立って当選した。

この間、日本共産党の食糧対策委員会の責任者、市民対策部員、組織活動指導部のオルグとなり、板橋事件、世田谷米よ寄せ区民大会、国鉄大宮工機部や日本車輛工場の争議などを指導した。

1950年1月コミンフォルム批判をめぐる日本共産党の分裂では、徳田球一・志田重男らの「所感派」＝主流派に属し、メーデー事件では先頭に立って指揮したが、火炎ビン闘争には一貫して反対した。これに先立つ、長谷川浩や伊藤律指導の社共同運動や隠し田摘発闘争にも戦術上の誤りとして反対した。

1961年1月、日本共産党における「宮本路線」に反対して離党した。また前年6月岩田選挙科学研究所を設立し、同月『選挙科学ニュース』や、半月刊紙『政経選挙新聞』（1961年10月～1981年4月、通巻で415号）を発行、革新・進歩の立場から国民の選挙動向を追跡し、現代日本政治の動態を分析した。

1999（平成11）年8月23日老衰により死去した。享年93歳。著作に、紺野与次郎との共著『労働組合の知識』（紺野英一）名で刊行、文苑社、1945年）、『労働組合の作り方』（日本共産党労働組合部編で発表、1945年）、『東京都政を衝く』（西岡書店、1948年）や、「赤旗が宮城に入るまで」（『運動史研究』第8号、1981年8月）、「伊藤律は革命家か——体験から『偽りの烙印』（渡部富哉著——編者注）を批判する」（『労働運動研究』第290～291号、1993年12月～94年1月）などがある。

1 生い立ちと経歴

細川嘉六との交遊

岩田 あなたから手紙をもらい、大原社会問題研究所と聞いて細川嘉六先生のことを思い出していました。細川先生は世田谷区の世田谷5丁目2832番地に住んでおられ、私は戦争が終わった当時、まことに有意義な交わりをさせてもらいました。

細川先生は、大原社会問題研究所に在職中、1918（大正7）年の米騒動について研究しておられたそうです。

私は小学校5、6年生のころ「萬朝報」を読み、日本中で米騒動が勃発し、軍隊が出動してこれを鎮圧したことを知りました。米騒動は私が社会に関心を向けるきっかけとなった出来事でした。

1946～7年当時、細川先生は日本共産党の統制委員でした。先生からは直接、米よこせ闘争＝食糧闘争について指導を受けました。

信頼し合った同志の1人に、全協時代にオルグ仲間だった内野壮児がいます。私は内野とよく細川先生宅に通い、米騒動や、先生がヨーロッパ留学中にモスクワで片山潜に会い、日本革命のあり方について語り合った話や横浜事件のことについて聞きました。

—— 細川嘉六さんは、1936（昭和11）年、大原社研が大阪・天王寺から東京に移転が決まったさい退職されました。先生はのちに評論家として活躍され、米騒動の研究もつづけておられたようです。

岩田 先生が怒りを込め、口角泡を飛ばして話されたことの一つは横浜事件に対する糾弾でした。先生は論文「世界史の動向と日本」（『改造』1942年8月号）を発表され、これが治安維持法に違反するとして検挙された。

横浜事件は神奈川県警察部がでっち上げたものです。先生は戦争中ずっと獄にあり、戦争が終わったのちに免訴となって釈放された。先生は「あれは腸が煮えくり返る事件」だったと怒り心頭でした。

先生は釈放されてすぐに、こんどは事件をでっち上げ、自分を検挙し尋問した神奈川県警察部の特高刑事3人を告発した。裁判は最高裁までいって勝訴した。その執念たるやすごい。

私は細川先生がアカデミックでどう評価されているのか知らない。先生との濃厚な交際は占領期だけでしたが、先生とは民主主義日本の形成に向けた情熱の一点で尊敬し敬愛しておりました。

だから、細川先生が1947年4月の第1回参議院選挙に日本共産党の公認で立ったさい、私が選挙責任者として手伝い当選を勝ち取りました。先生の入党手続きも1946年1月に私が代わってしました。

早実に進学

—— 本題に先立って、岩田さんの経歴についてお尋ねいたします。お生まれは東京ですか。

岩田 そうです。私は日露戦争が終わった翌年、1906年（明治39）年に牛込区矢来町（現在は新宿区神楽坂）に生まれました。矢来町一帯は旧若狭国小浜藩主の酒井家の所有地で、私の家は神楽坂の毘沙門天善国寺の裏手にあり、現在は新潮社の本社ビルとなっているが夏目漱石の住居がすぐ近くだった。

私は6年制の市谷尋常小学校を卒業して早実（早稲田実業学校）に進学した。

早実は野球の名門校として知られています。けれども早実は当時、秀才がめざす府立一中（東京府立第一中学校＝現東京都立日比谷高等学校——编者注）組に及ばないが、2番目か3

番目に秀才だといわれる連中があこがれた学校でした。日清一日露戦争をへて興隆著しい日本の実業界で飛躍したいという、まあ適度に優秀で、実業をもって立身出世を志す連中が入学していた。私もそうです。

当時の早実はや大の敷地内の一角、早稲田鶴巻町にありました。親父が病気がちで、私自身早く社会に出たいと思っていたのと、早実が自宅から徒歩10分の距離で近かったので進学した。通学時間が短ければその分、勉学に専念できます。

もう1つ私が早実に入った理由は、早実の図書館が東京市の中等学校で一番充実しているという評判だった。もし読みたい本や参考図書がなかったら、早大の図書館を利用する便宜も図られていた。

ロシア革命と米騒動に刺激

岩田 私は少しませせていました。私は小学5、6年生のころ「萬朝報」を読んでいた。「萬朝報」は権力者や、各界で著名な人士のスキャンダルや不正を暴露する新聞として人気がありました。親父が「東朝」（東京本社発行の「朝日新聞」——编者注）より「萬朝報」を好み、ある種の娯楽として仕事の帰りに買ってきては自宅で時間をかけて読み、捨てないで玄関に積んでいた。

私は子供だから暴露記事などに興味がない。私の記憶では「萬朝報」はむしろ政論紙なのです。私は「萬朝報」が記事にルビをふってあったので、漢字を早く覚えられるだろうと思ったのと、1917（大正6）年のロシア革命や翌年の米騒動に興味をもってむさぼるように読んだ。

1917年3月当時の「萬朝報」は、特大の見出しで「露国のペテログラートで革命勃発」「露国皇帝退位」「露国、各地でソヴィエト結

成」といった記事が躍っていた。

1917年11月になると、新聞に「左翼過激派レーニンとトロツキー、政権を奪取」「ケレンスキー首相、ついに逃亡」といった記事も出ていた。

米騒動についても「萬朝報」は当初これの子細に報道し、報道禁止となったのちは、陸軍大将で軍をバックにした寺内正毅内閣に対してビリケン内閣＝非立憲内閣と呼んで断罪していた。「萬朝報」の記事は痛快だった。現在ではそうした新聞はない。

—— 小学生時代に、黒岩涙香の「萬朝報」を読んでいたとは驚きです。

岩田 読むといっても目で字を追う程度のもので、よく理解できなかったと思う。1917、8年当時「萬朝報」はツアー体制の崩壊や、富山県魚津の漁港からはじまった米騒動に関する記事を詳しく報じていた。

私はロシア革命が成功したのちの労農ロシアの建設や、日本軍のシベリア出兵、米騒動の行方が気になって「萬朝報」の記事にアンダーラインを引きながら読んでいた。あるとき親父から「このバカ野郎っ、子供のくせにロシアの記事なんか読むな」と怒鳴られたことがありました。

天野為之博士の授業

岩田 私が社会問題に関心を抱いたのは、米騒動の記事を読み、また早実で天野為之博士の授業を受けたことがきっかけになっていると思います。

天野博士は大隈侯を補佐して早大を建学した功労者です。博士は私が早実に入學する以前、専門部商科の教授と早実の校長を兼ねておられた。けれども私が早実に入學したときは早大の学長に就任され、5年生のときまた校長として戻って来られた。

私は1934（昭和9）年6月に、日本で最初の電気溶接学校を設立したが、これも実業教育、青年教育へ向けた博士の情熱に刺激され、憧れていたからなのです。

早実を卒業して70年近い。現在も私にとって天野博士と、担任で物理教師の苫米地貢（とまべち・みつぎ）先生は永遠の師であります。

—— 天野為之は大隈重信が旗揚げした立憲改進黨の代議士として、創設期の帝国議会でも活躍していますね。

岩田 代議士時代のことはよく知りません。天野博士は言論人としての顔もあり、早大教授の前は「東洋経済新報」の主筆だった。石橋湛山は博士の薫陶を受けて、言論人として育ったそうです。

私が、高名な経済学者で、近代日本の政界、言論界、教育界で活躍された天野博士の授業を受けられたことはまことに幸せだった。

博士の代表的な著書に『経済原論』（富山房、1886年）があります。名著といわれていますね。博士は早実の授業ではこの『経済原論』を教科書として使っていたのです。

—— 理解できなかったのでは？

岩田 理解できましたよ。博士はよく板書し、事例をあげて、ポイントのところは重ねて説明していた。17、8歳の私に経済理論の知識などない。博士は生徒に理解してもらおうと入念な準備をして授業に臨んでおられた。

博士の『経済原論』の開巻冒頭に、生産の三要素として資本、土地、労働があげられています。最初の授業はこれをテーマにしたもので、私は授業中、博士の説明になんら疑問を持たず基礎知識として理解した。

ある日、博士の授業を受け自宅で復習しているとき1つの疑問がわいた。資本をもつ資本家、土地をもつ地主、労働力をもつ労働者は生産の三要素です。資本家のばあい本人が死んでも資

本＝株券や預貯金、また工場、機械、道具など生産手段は残りますね。地主にあっても土地や農機具は残ります。

ところが労働者と農民が死ぬと労働力が消失する。私ははっと気がついた。地上から労働者と農民がいなくなれば、資本や土地は効用がなく死物に過ぎないとね。さらに私は思いをめぐらして、労働者が資本を管理し農民が土地を所有・耕作すればなんら矛盾がなく、本来、資本家も地主も無用な存在なのではないかという結論にたっした。

私は翌週の授業でこの点を質問した。天野博士は「そうした主張は社会主義者の考え方です。私はこの見解に立たないが、1つの思想として存在する。そうした思想は労働者や小作農から支持されている」と答えられた。

私は驚愕した。というのは大逆事件以来、社会主義者について国体を壊す極悪非道の「主義者」だと喧伝されていたからです。また博士は「社会主義者の主張に耳を傾けることも大事です。社会主義者の学問研究は資本と労働の矛盾を究明し、これが解決することを原点としていますからね」と言われた。

やはり先生は偉い。先生は授業が終わって、教室から出た私を廊下でさり気なく呼び止め、ドイツにカール・マルクスという経済学者がいて『賃労働と資本』（河上肇訳、弘文堂書房、1919年）を著していることや、河上博士が『貧乏物語』（弘文堂書房、1917年）を出版され、参考になるので読むよう薦められた。『賃労働と資本』も『貧乏物語』も早稲田の古本屋で買い、繰り返し読みました。

早実を卒業——衆立無線研究所に入所

岩田 早実在学中、私がもう1つ夢中になったのはラジオ技術の修得です。理工系の科目群に物理や工学といった科目があり、苫米地貢先

生が担当しておられた。先生は無線工学の専門家で、黎明期の日本におけるラジオ研究の第一人者です。

私は授業のほか、課外活動でも先生から無線放送や電話の理論、ラジオ制作技術を教わった。先生は多少呑み込みが早い私に、早大専門部の理工科に無線工学の講座ができたので進学したらと勧めた。

けれども父が結核を患い、家計が窮迫したため断念した。私は長男です。私はいったん早実を卒業して家計を助けることにした。

当時、無線やラジオ技術は最先端の科学でした。東京帝大や早大に、専門学校にもそうした講座が設けられた。苦米地先生はNHKの創立委員や、ご自身が創立した衆立無線研究所（1921年）の経営、専門誌『無線と実験』（無線実験社、1924年5月）の発行準備などで多忙をきわめておられた。私は苦米地先生の誘いで、その衆立無線研究所に技術員として入所した。

衆立無線研究所は、現在では忘れ去られていますね。研究所の技術員はNHKの開局にさいして7、8人が移籍しています。先生も亡くなるまでNHKの技術顧問をなさっておられました。

—— 研究所ではどのような仕事をされたのですか。

岩田 無線技術の研究や実証実験です。1924（大正13）年7月に羽越線が完成し、これを記念して先生と私が中心となって、新潟—長岡駅間でラジオ放送を実験して成功し、新潟県民をびっくりさせました。

これに先立つ1922年、私は苦米地先生に随行して、小型送信機を携帯して全国各地の中等学校や高等学校を巡回講演し、無線実験を行いました。

先年、放送博物館（東京・愛宕）から衆立無

線研究所のことについて話を聞きたいとの申し入れがありました。さすがNHKです。放送博物館に、衆立無線研究所に関する資料——苦米地先生や私が写った写真、事業報告書などが収集・陳列されていた。

ラジオ店の開業と渡朝

岩田 衆立無線研究所は事業規模が小さく、国や企業の支援もなく、給与もそう多くなかった。私は商売で身を立てようと1925（大正14）年に、牛込区通寺町（現在は新宿区神楽坂6丁目）にラジオ店を開いた。

当時、神楽坂は日本橋や銀座、新橋ほどでないが、にぎやかな街だった。また神楽坂の境界は料亭や芸者置屋が多く、いまでも毘沙門天善国寺の周辺を歩くと三味線や琴の音が聞こえてきますが、民政党や政友会の各派閥のたまり場でもあった。

私は、神楽坂が流行に敏感な街だからラジオにも飛びつくだらうと見込んで開店したのだが、事業は失敗だった。当時ラジオはとても高価で、そう売れるものでない。また大通りに店舗を構えたが、借地で、そのため大家の相続紛争に巻き込まれて3年ほどで店を閉じた。

1928（昭和3）年、肺結核で寝込んでいた父が亡くなった。私はその年の7月、京城ラジオ商会の主任技師として現在のソウルに渡った。朝鮮では前年1927年4月に、京城放送局ができてラジオ放送が始まりブームとなっていた。

恩師の苦米地貢先生は、この京城放送局の設立にも関係しておられた。私は先生の紹介で就職した。給与は月額200円で、ほかに外地手当が15円、住宅費は会社負担という夢のような特別待遇だった。

—— どんな仕事をされたのですか。

岩田 無線やラジオ技術の指導と、ラジオに

関する啓発・宣伝です。どういうわけか朝鮮総督府が京城ラジオ商会を後援していて、京義道における巡回実験のときは総督府の係官が指揮していた。

私は京城ラジオ商会に1929年1月までの6か月間勤めました。約束は2年だった。けれども私は前年の3・15事件のことがとても気になった。3・15事件で早実の先輩や、労働農民党の同志が検挙された。

2 私の戦争期——入党と全協のオルグ

日本真空管製作所へ入社

岩田 1929（昭和4）年2月、東京に戻った私は、大森区（現在は大田区）の日本真空管製作所に真空管の主任検査工として就職した。本俸が140円で、ほかに手当が付いてやや余裕ある生活ができた。

日本真空管製作所は、1922（大正11）年に創業した新興企業です。会社は民生用ラジオの真空管を生産し、主力製品はNVV真空管で、東芝のマツダ真空管、日本無線のJRC真空管、松下電器のナショナル真空管と競っていた。

会社は技術革新にとっても熱心で、まだ技術が確立していないネオンの研究もすすめていた。日本真空管製作所は東京ネオンの母体になった会社です。東京の銀座一带にネオンが輝くのは1930年代の半ばですが、多くは東京ネオンが設置した。

1920年代に入って、現在の東京都大田区、品川区、港区と中央区の一部は、隣接する神奈川県横浜市や川崎市を含めて京浜工業地帯と呼ばれ、大阪と神戸を中心とする阪神工業地帯と並ぶ一大工業地帯となっていた。

日本真空管製作所は第1次世界大戦後における起業熱のなかで、京浜工業地帯に誕生した会社の一つでした。

日本労働運動も1920年代に入って、鈴木文治・松岡駒吉らの総同盟運動や、私らの全協（日本労働組合全国協議会）も京浜工業地帯が主要な舞台となっていた。私は日本真空管製作所に籍を置いて、本格的に労働運動の世界に飛び込んだ。

伊藤憲一と伊藤律

岩田 伊藤憲一の著書に『南葛から南部へ——解放戦士別伝』（医療図書出版社、1974年）があります。

—— 研究所では先年、伊藤憲一さんに南葛労働会や、占領期における日本共産党と産別会議の関係について記録しておきたいと申し入れ、承諾を頂いておりました。ところが伊藤さんは報告準備中に急死された。ちょうど10年前（1981年10月17日）のことです。

岩田 私は伊藤憲一とはある時点まで親密だった。けれども私が1961年に日本共産党を離党して以来、電話をかけても出てくれないし、手紙を書いても返事がこなかった。「脱党分子」「反党分子」とは一切付き合わないということなのだろう。

伊藤は青年期に結核を患い、健康に人一倍気をつけていたのですよ。伊藤は生前に自らの活動についてもっと語っておくべきでしたね。伊藤は1929年の4・16事件で検挙され、釈放されたのが2・26事件の年です。だから彼は7年間も獄中にあつた。

伊藤は、同じ伊藤でも伊藤律とはちがいに非転向を貫いた。一方、伊藤律は獄中でも要領よく立ち回り、豊多摩刑務所（東京・中野）に在獄中は、小野義彦が『「昭和史」に生きて』（三一書房、1985年）に書いているが、彼は教誨師の助手や教務雑役をしていた。

—— 教務雑役とはどんな役なのですか。

岩田 模範囚人から選ばれた、名目は世話役

ですけれども、実際は刑務所長のスパイなのです。同じ獄中の政治犯を監視・指導し、動静を報告する役目を担わされていた。

伊藤にはゾルゲ事件との関係もあった。だから、彼が1946年2月に党の中央委員、書記局員になったときは私は仰天した。

話を戻しますね。伊藤憲一の著書のタイトル「南葛から南部へ」は、日本労働運動の主要舞台が京浜工業地帯に移ったことをシンボリックに示しています。東京における1910年代、あるいは1920年代初めの労働運動の中心は、江東区、葛飾区、墨田区、いわゆる東部の南葛飾地区＝南葛だった。

1922（大正11）年10月に、渡辺政之輔・川合義虎らが南葛労働会を結成します。伊藤憲一は若くして南葛労働会で幹部の1人だった。彼は函館刑務所を釈放となったのち、こんどは蒲田の石井鉄工所に職を得て、京浜工業地帯の一つの中心地＝東京の南部で活動を再開した。伊藤は小学校もろくに出ていない。だから彼は、長谷川浩や伊藤律に遠慮していた。

—— 占領期のことですね。

岩田 そうです。日本労働運動の再建にとって伊藤憲一が共産党において最初の労対の責任者となったのは幸いだった。のちに共産党の運動は第一高等学校や東京帝大出の連中に、労働運動の場合は長谷川浩が、農民運動の場合は伊藤律が牛耳った。

伊藤憲一は理論の組立がやや弱い。他方で長谷川と伊藤律に、戦前に労働運動や農民運動の経験などはまったくない。

長谷川浩と伊藤律——戦後革命期に2人が徳田に寵愛され、共産党の運動をリードしたことに問題があった。2人は徳田の威光をバックに、あるときはマルクスが、レーニンがどうのこうのと言って強引にリードした。

—— 1948年～49年当時、伊藤律氏が主導

した社共合同論などは、統一戦線の理論から言っただけの問題でしたね。

岩田 伊藤律は「アカハタ」で社会党を排撃し「良識ある社会党員は決然と日本共産党に入党せよ、これが社会主義者の道だ」と、青森市で、あるいは長野県や山梨県に出かけて煽っていた。

なお、質問書にありました、戦争中における私と紺野与次郎との関係については現在記憶を整理中です。私は太平洋戦争中、紺野とは連絡をとっていない。けれども東京・南部における伊藤憲一の様子については、電気溶接学校の経営に専念していた私の耳にも入ってきた。伊藤憲一には労働者の魂がありました。

政治研究会の会員

岩田 私が社会運動に首を突っ込んだのは、1924（大正13）年6月、加藤高明内閣（第1次）が護憲三派内閣として成立したときです。前年10月に、山本権兵衛首相が「普選断行」を声明しましたね。山本首相の声明は、桂太郎内閣以来、軍閥や官僚の横暴が著しくこれに反対する議会人、知識人、労働陣営が憲政擁護運動を始めて以来10数年余に及ぶ闘争の成果だった。

もちろん「普選断行」といっても、実質は男子のみの普選で、治安維持法の制定と抱き合わせをねらったものだった。けれどもこれにより、労農大衆が合法的に政治に参加する道が開かれた。

他方で、このことは、それまで急進的であった労働運動その他に方向転換を迫った。私は新時代の到来としてこれを歓迎した。私は日本革命がロシア型でなく、労農大衆が帝国議会に進出することで平和裏に達成できるのではないかと思った。

だから私は1924年6月に、早大の安部磯雄

先生、大山郁夫先生や、賀川豊彦、鈴木茂三郎、布施辰治弁護士、財政学者の高橋亀吉、中央公論社の嶋中雄三社長らが音頭をとって結成した政治研究会の会員となった。

政研＝政治研究会は、山本首相の「普選漸行」声明を受けて、単一無産政党の結成を近時に展望しその準備段階として結成した団体です。

政研が労農無産陣営における総結集の旗をかざし、帝国議会に労働者・農民の代表が進出できるという状況に私の心が躍った。私は四谷区荒木町（現在は新宿区荒木町）の布施弁護士の事務所を訪ねて入会を申し入れ、会員となった。

——なぜ布施辰治弁護士の事務所へ？

岩田 政研の本部は布施弁護士の事務所にありました。のちに牛込区天神町（現在は新宿区牛込天神町）の東洋経済新報社に移りましたが、どちらも自宅から徒歩14、5分の距離だったので頻繁に出かけた。私は布施法律事務所、筆頭格の神道寛次弁護士に会って入会した。政研の事務は初め神道弁護士が、のちに東洋経済新報社の丸岡重堯（まるおか・しげたか）という人が仕切っていた。

——丸岡重堯と聞いてびっくりです。丸岡さんは創立期の大原社会問題研究所のメンバーで、イギリスの経済学者ウエップ夫妻の思想や、フェビアン社会主義の研究者として知られています。研究所に2、3年おられ、のち「東洋経済新報」の論説記者として転身されたようです。丸岡さんは、評論家丸岡秀子さんの最初の旦那さんですね。

岩田 丸岡氏は学者タイプでしたね。けれども決して権威的でなかった。話は沈黙思考型というよりカミソリ的で、よどむところがない。これは私の勝手な観察です。丸岡さんは政研に思いを込めていました。だから政研の活動の佳境期に、本部が、東洋経済新報社に移ったので

すよ。

私は神道弁護士とは生涯付き合い合わせてもらいました。誠実で、謙虚な方で、歴史に名を残す人はやはりちがう。神道さんは異色の弁護士です。かつては陸軍将校で、陸軍工科大学（陸軍工科学校——编者注）を卒業したそうです。

政治研究会の挫折

岩田 単一無産政党は成就しなかった。総同盟内の共産党系グループが評議会（日本労働組合評議会）を結成して鈴木文治らの主流派と対立し、日農における左右の対立、また指導部においても嶋中雄三・高橋亀吉ら自由主義者の知識人と労農団体出身者の反目があってまとまらなかった。

政研の活動で記憶にあるのは、治安維持法の制定反対闘争や、普選の即時実施すなわち婦人を含む男女平等の普選を実現する運動でした。政研は『政治研究』（1925年7月創刊）や『民衆政治』（1925年4月創刊）といった雑誌を発行していた。私はこれらの雑誌により啓蒙され、政治への関心と知識を深めたのです。

——政研の解散は、日本社会運動における分裂の起点となっていますね。

岩田 そうです。まことに残念です。これはいったい誰の責任なのか……。自戒を込めて言うのだけれども、総同盟に問題があったというよりは、むしろ共産党系の団体における急進さ、器量や知恵の無さが一因をなしていたと思う。非合法期の日本共産党に、幅広い戦線を構築するという視点が希薄だったのでしょう。

——占領期もそうでしたね。1946年1月、野坂参三が亡命先の中国から帰国し「愛される共産党」の路線を打ち出しました。しかし徳田球一らの指導部は日本社会党に対して終始、排撃的でした。

岩田 山川均が自伝（『山川均自伝——ある

凡人の記録』岩波書店、1961年——編者注）で、戦前日本の無産政党史について「七分八裂だった」と書いていましたね。やはり後悔が残ります。神道弁護士が晩年、政研について「なんとか（無産陣営を）一つにまとめたかった」と述懐しておられた。

労働農民党員として

岩田 1925年6月、日本で最初に結成された無産政党＝農民労働党が即日結社禁止となりました。これは予想された事態だった。農民労働党は日農主体の政党で、単一無産政党として結成されたものでない。無産陣営における分裂が、加藤高明内閣につけ込まれたのです。加藤内閣が護憲を標榜しても、天皇制体制下の内閣です。だから無産陣営はなおのこと一つにまとまるべきだった。

私は1926（大正15）年3月か4月に、労働農民党＝労働党に入党した。労働党こそ合法無産政党として、総同盟や日農も加わって、日本の無産陣営を代表する有力な政党に発展すべきだと考えたからです。

けれども労働党は基本的に左派を排除して出発した。だから共産党系は「門戸開放」を要求したのです。

ところがこの要求に、総同盟や中間派の総連合（日本労働組合総連合）が反対して脱退してしまった。この結果、杉山元治郎委員長らの執行部が責任を取って退陣し、1926年12月に大山郁夫先生が委員長、細迫弁護士を書記長とする労働党が誕生した。

—— 1926年12月のトップ人事の変更は、労働党における改組ですね。

岩田 改組なのか分裂なのか——これは分裂でしょう。これにより合法無産政党は左派が大山先生の労働党、麻生久らの中間派が日本労働党、右派が総同盟を母体に社会民衆党を結成し

て三派鼎立となった。

日本の無産陣営は、政研が構想したシナリオとはまったくちがう実態となってしまった。ほかに非合法の日本共産党も存在した。あげくに大山先生の労働党は1928年の3・15事件に連座して解散させられてしまいました。

私が労働党員として取り組んだ活動は、若槻礼次郎内閣や田中義一内閣のときに露骨になった、中国における国・共内戦に対する干渉に反対する闘争です。労働党は中国共産党における民族解放闘争を支持し、日本軍や右派の社会民衆党が支持した蒋介石の国民党軍を批判した。私らは、中国における民族独立の問題は中国人民にまかせるべきで干渉すべきではないという見地に立った。

労働党における対支非干渉運動については、機関紙『労働農民新聞』（1927年1月1日創刊）に詳しい。私は牛込支部に籍を置いて、干渉反対のビラを東京市電の沿線の駅や日比谷公園で撒きました。

ほかに労働党員のときの活動として記憶に残っているのは、当時は恐慌期でしたから失業者の救済や、失業手当法、最低賃金法、婦人・年少労働者の保護法制定の運動や、1928年2月の普選第1回選挙（第16回総選挙）に向けた労働党候補者の支援などです。

—— 労働党は、1928年4月10日、田中義一内閣により3・15事件との関連で解散命令を受けています。労働党の関係者も多数、検挙されましたね。

岩田 そうです。前年9月の府県会選挙でも、第1回普選でも共産党員が労働党から立候補する戦術を採り躍進しました。これに危機感を抱いた田中内閣が共産党のダミー団体として労働党、評議会などに解散を命じたのです。

私はこの時点で日本共産党に入っていない。しかし私の周囲に共青（日本共産青年同盟）の

連中もいた。またさつき名前が出た長谷川浩が内野壮児と一緒に、東京帝大の学帽をかぶって接触してきていた。「無産者新聞」（日本共産党系の合法紙、1925年9月26日創刊——编者注）を読まないか、という勧誘だった。のちに内野とは全協でオルグとして活動を共にした。

1928年の3・15事件は、共産主義者のみならず、無産陣営全体において大打撃となりました。私も検挙される懸念がありました。だから私は苦米地真先生から京城ラジオ商会の技師の話を持ち込まれたとき、迷うことなく承諾して朝鮮に渡った。

日本共産党に入る

岩田 私は4・16事件の直前、1929年2月に京城＝ソウルから東京に戻った。私はその年の4月に、日本真空管製作所への就職が決まったことの報告や、別件の相談があって細迫弁護士事務所に訪ねた。そのとき先生から労農党の再建構想について聞いて協力を求められた。新労農党の結成のことです。

新労農党は1929年11月1日に結成された。かつての労農党は支部が弱体で、そのぶん共産党系の団体や日農に振り回される傾向にあった。細迫さんの構想は、京浜工業地帯に合法性を重視した労働組合を結成してこれを党の基盤にする、というものだった。

私は翌日から品川、蒲田、大森地区の工場をオルグして回り、1929年4月か5月に京浜合同労組を結成して書記長となった。現在、京浜合同労組の結成と活動について裏付けをとっています。

ところが新労農党の結成以前からそうした傾向があったのだけれども、党内に、純正の左翼政党は共産党のみで新労農党の結成は間違っており解消すべきだ、という主張が盛り上がっていた。この新労農党に対する「解消論」は、治

安維持法体制のもとにおける合法政党の存在や独自性を否定する主張だった。

—— 共産党は『日本共産党の五十年』（1972年）で、新労農党に対する「解消論」について間違った方針だったとさり気なく自己批判をしていますね。

岩田 自己批判？ そんなのしていないですよ。したとしても遅い……。むしろ私にとって衝撃だったのは、労農党＝新労農党の独自性を主張していた細迫先生がとつぜん「解消論」に同調したことです。

私は細迫さんの豹変に驚いた。先生は合法活動の重要性とか、労農党における主体性確立を言っておられたのです。この点は、大山郁夫・上村進・細迫兼光著『新労農党樹立の提案』（同人社、1929年）でもつよく主張しています。

党内でも「解消論」が多数を占めた。結局、新労農党は満州事変の年1931年7月に、麻生久や三輪寿壮らの全国大衆党と合同して全国労農大衆党となった。

私はこの事態に困惑したが、細迫先生の行動を了解した。細迫・上村両弁護士は3・15事件や4・16事件の被告の弁護をされておられ、ギリギリのところまで共産党と接点がありました。私も次第に1つの「純正左翼政党論」に傾きつつあった。私は新労農党が解散する直前、1931年4月に共産党に入党した。

全協のオルグとして

岩田 私は日本共産党に入党し、東京市委員会に所属して全協のオルグの任務を与えられた。同じころ内野壮児も、共青にあって全協のオルグとなった。内野は私より2つ3つ歳下ですが指導力がありました。

このことは、内野が関与した東京市電争議（1929年12月、30年4月）に示されています。

内野は全体と局面の分析や交渉術に秀でていた。相手に対して優位とみるやストライキを指導し、また弾圧される前に調停に持ち込む方針を採った。

東京市電争議でも最初の争議は調停に持ち込み、賞与削減の減額や昇給停止を一時的に撤回させました。私は戦後すぐの時期における日本共産党のリーダーとして、黒木重徳と内野壮児を評価しています。

—— 岩田さんは1950年6月、日本共産党の分裂では「徳田派」でしたね。徳田球一を評価していたのではないのですか。

岩田 私は1950年6月に日本共産党の事務を統括する主幹になったが、必ずしも「徳田派」ではない。中西功と同じ独自の見地にあった。私は火炎ビン闘争に一貫して反対をした。火炎ビン闘争は志田重男だけの責任じゃないのです。徳田の了解もあったのです。

とにかく私は日本真空管製作所に2年ちょっと勤めた。私は検品率＝不良品のチェック率向上で表彰され、退社について社長から慰留されたが革命家の道を選んだ。時代がそうさせたのでしょ。

—— 岩田さんは全協のオルグとして、どのような活動をされましたか。

岩田 第1に、京浜合同労組を全協につないで組合員を産業別に整理しました。全協の指導部は当時、産業別組合こそ最良の組織形態だとして、これまでの合同労組を産業別に再編する方針を採った。

じつは私はこれに反対だった。だって合同労組には地域の事情や、産業・職種を超えた近隣工場労働者との連帯の絆があった。これは労働運動において重要です。ちなみに内野もこの産業別再編の路線に反対だった。

——1930年6月、神山茂夫らが全協刷新同盟（刷同）を結成しました。刷同の結成は全協

指導部における産業別再編の路線と関係があるのですか。

岩田 きちんと説明できないが、あると思いますね。あなたはいま刷同について神山が中心となって結成した、というニュアンスで話された。

これは違う。実際は、内野が、南巖（みなみ・いわお）や佐藤秀一らの先輩に相談してまとめ、神山にも提案してまとまったもので中心人物は内野です。神山は自らを誇大に宣伝する傾向があるのです。

なお本題とは関係ないが、神山は私と同時期に入党しています。宮本顕治は私より1、2か月入党が早い。

言うのを忘れるところでした。内野は刷同の問題で全協から排除されたが、彼は指導部の極左偏向や性急さを問題にしていた。合同労組における産業別再編の問題も、やはり性急だったと思いますね。

他方で私は当時、内野とは違い、やや激発主義の傾向にあった。当時、日本共産党は田中清玄のもとで極左主義を採用し武装暴動を煽っていた。全協に対しても、東京市委員会を通じて私に労働争議の激発や街頭デモの指示があった。

1930年5月1日のメーデーは「武装メーデー」とも言われています。これは田中委員長が指示したものだった。とにかく昭和恐慌期ピークの1930、31年ころは、左翼陣営は異様なまでに興奮・高揚していた。

私はオルグとして東京・南部地区や、全協の一般使用人組合（1931年5月31日結成）を担当していて、前者については、杉浦鉄工所、東京瓦斯電気工業、新潟鉄工所、星製菓、鐘紡（東京）、芝浦製作所などの争議に関係しました。

先ほど私は、内野壮児が東京市電争議にどう

対応したか話しました。私は東京市電争議でも、牛込区の車庫支部を分担オルグした。だから私は内野のオルグぶりを身近に見て、その緻密さや冷静さに感心したのです。

先年、私は東京市電争議について調査したく、『東京交通労働組合史』（東交史編纂委員会編、1958年）を借りて読みました。けれども私の活動について何ら書かれていなかった。通常、裏面での指導や活動は紹介されることはないのですね。

浅草六区の映画館争議を主導

岩田 1931（昭和6）年9月18日、日本軍部が中国への侵略拡大をめざして満州事変を起こしました。私は、共産党の東京市委員会から満州事変に反対する大衆的な反戦デモを実施するよう指示された。この機会に、私が指導した東京・浅草六区における映画館争議について紹介したいのですが。

—— どうぞ。

岩田 1931年5月31日に、全協の一般使用人組合が結成された。組合は私がオルグしてきたもので、モグリや清掃員など映画館従業者、楽団員、映写技師、弁士なども入っていた。私は反戦デモを派手に、また民衆に強烈にアピールするには浅草六区を舞台にするのが一番だと思った。

浅草公園は六街区に分かれていて、公園六区＝浅草六区は封切の映画館が集中し、ほかに歌劇、寄席、ストリップ劇場や飲食店もあり、当時は日本で最大の歓楽街だった。吉原遊郭も観音様の浅草寺や仲見世もすぐ近くだった。

当時、浅草六区の映画館街はトーキーへの転換で、弁士や楽団員が職を失い、また不況でレビューガールも解雇された。浅草公園には失業者があふれ、その数は1万人にのぼった。私は「西天風」という芸名で、すなわち芸人を装っ

て映画館や演芸場に入ったりし、水の江ターキーら松竹座のレビューガールの争議を組織し支援した。

—— ターキー？

岩田 水の江瀧子のことですよ。ターキーは当時「男装の麗人」として有名だった。人気も絶大で、彼女は雑誌の表紙やグラビア頁を飾っていた。だから松竹座の華やかなりしレビューガールの争議は話題となり、注目された。

さて、私は1931年9月27日に、浅草六区において満州事変に抗議する集会を準備し、全協傘下の一般使用人、日本土木、印刷・出版、金属などの組合にも呼びかけて「9・27反戦デモ」を取行した。満州事変から10日後のことです。

デモの参加者は総勢350人程度で、そう多くない。けれども日本一の歓楽街・浅草六区で堂々とデモを実施した。しかもデモ行進中、私らは沿道に集う1万人を超す見物人に直接に、また各映画館の屋上から「満蒙侵略反対！」のピラを撒いた。これがそのとき撒いたピラの1枚です。

—— よく保存しておられましたね。

岩田 検挙や、家宅捜査されたさい押収され、証拠となるような物品を自宅に置くようなことはしませんよ。

私は、浅草六区における映画館争議で検挙され、菊谷橋警察署に拘留されたが、こうしたことを想定して、世田谷区代田1丁目635番地にあった物置小屋に共産党系の「無産者新聞」や労農党の「労働農民新聞」、また京浜合同労組、全協一般使用人組合、その他の団体の重要文書を保管していた。

検 挙

岩田 話を戻します。浅草六区の映画館街において撒いたこのピラの冒頭に「日本帝国主義

は、満蒙侵略を開始した！ 労働者、農民、市民、青年を犠牲にして、恐慌打開を目指す満蒙侵略戦争反対！」とありますね。

満州事変に対する反対デモはすさまじいものだった。デモ参加者は先ほども言いましたが350人余にすぎない。けれども私ら全協傘下の組合員は「満蒙侵略反対」を叫び、ビラを撒いて氣勢をあげ、勢い余って交番を襲撃し占拠した。

他方で、警視庁は、隣接各署から数百人もの警官を動員し包囲し鎮圧にかかった。だから浅草六区の映画館街は、1万人を越す見物人の前で、私らのデモ隊と警官隊の間で乱闘となった。これこそ活劇です。

この反戦デモは満州事変勃発後、日本において実施された最初のデモであります。私らは、当時コミンテルン日本代表としてモスクワに駐在していた片山潜に、この反戦デモの顛末について報告しました。

報告書の原案は私が書きました。片山潜は私らが敢行した反戦デモを高く評価し、これを世界の民主人士に報告した。その結果、私を中心となって企画・準備した日本の反戦デモが世界に紹介されたのです。

私はこの映画館争議において検挙された。私は警視庁菊谷橋警察署に連行され、地下の拷問室で叩きのめされた。

けれども私が日本共産党員であり、全協のオルグであったことについては徹底してこれを否定した。私は演劇愛好者であり、怪しいと思うなら証拠を出せと突っぱねた。私は29日間の拘留で釈放された。

さいわいなことに、私はこのときまだ日本真空管製作所に籍があった。また私は主任検査工という立場で工場でも信頼されていた。これが考慮されたのかもしれない。

釈放となったのち、私は日本真空管製作所を退職した。けれども退職後も、私は全協のオルグとして、荏原区、麻布区、神田区などの映画館争議を指導した。

全協オルグとしての私の活動については、ほとんど記録されていない。渡部徹著『日本労働組合運動史——日本労働組合全国協議会を中心として』（青木書店、1954年）にも書かれていません。

満州事変が勃発した当時、東京・浅草六区における争議をはじめ、東京市の映画館争議はたいてい私が指導しました。

全協のオルグとして、私が指導したこれらの映画館争議が文献上なら記録されていないことは、なにか自らの人生が消されているような感じがしてならないのです。

（つづく）